

令和元年6月25日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03398

研究課題名(和文) プラハとダブリン、亡霊とメディアの言説空間 複数の文化をつなぐ《翻訳》の諸相

研究課題名(英文) Prague and Dublin: discourse spaces on ghosts and media. Aspects of "translation" between cultures

研究代表者

川島 隆 (Kawashima, Takashi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10456808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：多民族・多言語都市プラハとダブリンの複雑な状況下で生きていた作家たちが、本来は知覚不可能なはずの「亡霊」的なものを知覚させる「メディア」への意識を尖鋭化させていたことが確認された。その際に得られたとりわけ重要な知見は、19世紀末から20世紀初頭にかけて流行したオカルティズムやスピリチュアリズム(心靈主義)が、いわば「見えないものを見る」営みのお手本として、作家たちのアイデンティティ構築の軸をなしていたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ともすれば怪しげなもの、迷信的なものとしてイメージされがちなオカルティズムやスピリチュアリズムの文化史的な意義を明らかにした。この点に、まず大きな意義がある。さらに、「亡霊」をめぐる文化現象と、写真や映画、蓄音機やタイプライター、電話や無線通信といった新しいメディアがもたらした社会的なインパクトを、モダニズム文学というレンズを通して一つの連続体として捉えることに成功したのも重要である。

研究成果の概要(英文)：In the course of this research project, we found out that writers who lived in the complicated situation in the multiethnic and multilingual cities Prague and Dublin were often highly conscious of the role of "media" that make something unconceivable--such as ghosts and spirits--conceivable. Of particular importance was the fact that at the turn of the 19th and 20th century, occultism and spiritualism served as a model for the identity formation of those authors, since the practices of occultism and spiritualism were nothing but paradigmatic attempts to make something invisible visible.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：アイルランド表象 ナショナル・アイデンティティ 亡霊文学 オカルティズム/スピリチュアリズム
プラハのドイツ語文学 多言語状況 メディア理論 翻訳理論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

20世紀初頭のブラハとダブリンは、複数の民族・複数の言語が入り乱れる都市であった。その状況下では異なる民族のあいだの対立や衝突がしばしば起こり、しばしば言語の問題がその対立の軸をなした。被支配の立場に甘んじていた人々が支配層に対抗しつつ文化的な主導権を握ろうとする闘争も、また逆に、地位を脅かされた支配層からの反攻も、往々にして「母語」の礼賛を通じたナショナル・アイデンティティの醸成という文化戦略を採用したのである。

世紀転換期のヨーロッパを広く覆った「言語懐疑」の思潮は、このように複雑な民族問題・言語問題の渦中にあったブラハとダブリンにおいてとりわけ強く、「言語危機」と呼ばれる状況を生み出した。他ならぬこの状況がもたらした稀にみる文学的な生産性を詳らかにするべく、多くの独文学者と英文学者が参加し、基盤研究(A)(2006年～2009年)「ブラハとダブリン

20世紀文学の総括の試みとしての『二都物語』(研究代表者:河中正彦 城眞一)および基盤研究(B)(2011年～2013年)「ブラハとダブリン、20世紀文学の二つのトポス 言語問題と神秘思想をめぐって」(研究代表者:城眞一)という二回の研究会が組織された。そこでは、ブラハ出身のマウトナー、リルケ、カフカ、ダブリン出身のイエイツ、ジョイス、ベケットらの作家たちが、自らの民族的・言語的アイデンティティの揺らぎに直面しつつ、超言語的なものへの強い志向を共有していたことが明らかにされた。

本研究は、この先行する二回の研究会の成果を引き継ぎつつ、そこに新たな視点を加えて研究を深化させようとしたものである。

2. 研究の目的

先行する二回の研究会は、二つの多言語都市ブラハとダブリンで花開いた文学に対し、言語問題・ナショナリズム・神秘思想といった観点からアプローチした。その結果、単一言語の視座から作家・作品について記述する文学史記述では見落とされがちだった複数の言語領域・文化領域の相互作用の重要性が浮かび上がってきた。この認識に立脚しつつ、新たに「亡霊」と「メディア」を鍵概念としてブラハとダブリンの作家たちに共通する志向を取り出し、複数の言語と文化をつなぐ活動としての「翻訳」の豊かさに光をあてることを本研究はめざした。

本来は目に見えないはずのものが目に見える現象としての「亡霊」は、当時のブラハとダブリンの作家たちが志向した超言語的なもののいわば範例であり、同時代に大流行したオカルティズム/スピリチュアリズム(心霊主義)の潮流に彼らが強い関心を寄せたのは、当然のなりゆきであった。本研究は、オカルティズム/スピリチュアリズムが流行した19世紀から20世紀への転換期が、蓄音機・映画・ラジオなどの新たなメディアが誕生し普及していった時期と重なるという点に注目した。今日でこそ、オカルトと科学は相反するものとして捉えられるのが通例であるが、当時は、超常的なものと交信する「霊媒(media)」をめぐる言説と、最新のテクノロジーによる情報の「媒体(media)」をめぐる言説は境を接していた。両者は、目に見えないものと人間の知覚を媒介するという点で一定の互換性を持っていたからである。

3. 研究の方法

以上のような意味で、本研究では「亡霊」と「メディア」を分析の軸に据えた。その際、主に以下の三つの経路で研究を行うことを想定していた。

1) 19世紀末以降のアイルランドのナショナリズムは、アイルランド古来の伝統を甦らせることで宗主国との差異化を図ったアングロ＝アイリッシュと、外部から押しつけられたステレオタイプな他者像をあえて内面化することで独自のナショナル・アイデンティティ構築をめざしたゲーリック＝アイリッシュの二つを軸として推移した。このような、それ自体として虚構的な性格をもつアイデンティティと、非実体的な「亡霊」のモチーフとの親和性を手がかりに、イエイツ、ジョイス、ベケットなどダブリン出身の作家たちの作品を「亡霊」という観点から読み直しつつ、アイルランド表象の「亡霊」的性格を考察する。

2) 同様に「亡霊」的なナショナル・アイデンティティの意識を抱えながら生き、好んで「亡霊」モチーフのテキストを書いたリルケ、マイリンク、カフカなどブラハの作家たちが、同時代の言説空間の中で脚光を浴びつつあった「霊媒＝メディア」への関心を強めていた事実を重視し、彼らの文学的テキストのメディア論的位相を探る。

3) ブラハとダブリンの多言語状況は、異なる言語領域を媒介する「翻訳」の行為の重要性を必然的に照らし出す。そこでは単に一つの言語から別の言語へと文学的テキストが置き移されるだけでなく、異なる文化同士が接触し、異質な要素に触れた結果として文化そのものが変容していくプロセスでもある。そのような事例を集めるとともに、こうした文化間の移動に際して上記のような「亡霊」的性格のナショナル・アイデンティティがどのように推移したかを明らかにする。

4. 研究成果

本研究が取り組んだのは、まず、当時のヨーロッパにおけるオカルティズム/スピリチュアリズムという社会現象の広がりや規模とその射程である。当時のオカルティストたちは、自らの活動をあくまで「科学」と位置づけつつ心霊現象の研究に携わっており、そこに迷信/科学という二項対立図式はあてはめられない。彼らは主に雑誌メディアを媒体に積極的に情報発信を行っていた。彼らのメディア戦略というものの自体がきわめて興味深い研究対象であり、予想外

の広がりをもつ研究分野であることが明らかになった。

プラハとダブリンの作家たちは、そのようなメディアを通じて最先端のオカルティズム研究に触れるかたわら、自らも心霊集会（セアンス）を企画・実行するなど、心霊主義の拡大・流行に大いに寄与した。従来のドイツ文学研究における「亡霊」研究は、英文学研究における状況と比較して、研究がやや手薄であることが否めなかった。ドイツ文学においても「亡霊」研究が同様に成り立つことを示し、従来の英文学研究におけるそれをも包括した全ヨーロッパ的視座を打ち出したことが、本研究の最大の成果である。もとよりタイプライターや蓄音機やラジオなどの新メディアの発達により、自らの作家としてのあり方を問い直す必要に迫られていた作家たちにとって、こうした心霊主義的な活動は、アイデンティティを（再）構築するうえで重要な役割を果たした。目に見えない亡霊たちの声を聴き取り、テキストとして定着させることで可視的な世界と不可視の領域をつなぐ存在としての「霊媒＝メディア」に、作家たちはあるべき芸術家像のモデルを見出したからである。

その一方で、プラハとダブリンの作家たちが自らのナショナル・アイデンティティに対し、きわめてアンビヴァレントな態度を示していた事実が浮き彫りにされた。そもそもナショナル・アイデンティティとは、しばしば「大地」や「大樹」のメタファーで語られ、安定的なものであるとするものだが、本研究が分析の対象とした「亡霊」的な性格のナショナル・アイデンティティは、そうした安定志向とは相容れず、そこに帰属しようとする者の足場をかえって不安定化するような、いわば脱領域的な傾向を有している。それだけに、プラハとダブリンの作家たちが「翻訳」を通じて複数の言語圏・文化圏と交流していたという事実が、いっそう重要なものとして目に映じてくる。自らのテキストをたえず外部からの視線にさらし、自分自身の言語と文化を異化しつづけることで、脱領域的なアイデンティティの構築が可能になる。本研究は、特にプラハのドイツ語作家たちとチェコ語圏との交流や、シュルレアリスムのような芸術運動との相互作用に、そうした「翻訳」活動の範例を見出している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計20件)

1. 中村寿「リヒャルト・ハルマツの旧オーストリア 『ドイツ系オーストリアの政治 オーストリアのリベラリズムと外交政策についての研究』 (2)」(『独語独文学研究年報』45号、2019年、印刷中)【査読有】
2. 木内久美子「性差・位置関係・傍観・見世物性 サミュエル・ベケット『しあわせな日々』を「アリストテレスとピュリス」の図像から読み解く」(『POLYPHONIA』10号、2018年、1-28頁)【査読有】
3. 平野嘉彦「ベンヤミンと「秘められたドイツ」をめぐって 『死のミメシス』補遺」(『思想』1131号、2018年、44-60頁)
4. 阿部賢一「チャペックと戦争」(『チャペック兄弟とその時代』1号、2017年、149-161頁)
5. 吉川信「Museyroom Episode について ジョイスとナポレオン戦争」(『Joycean Japan』28号、2017年、84-93頁)【査読有】
6. 熊谷哲哉「記憶と病 クリスティーネ・ヴニケの『狐と島邨博士』について」(『希土』42号、2017年、94-111頁)
7. Kumiko Kiuchi: Finding a Form for the Speechless: Samuel Beckett and Miwa Yanagi's Zero Hour. Samuel Beckett Today/Aujourd'hui, 29(2), 2017, pp. 325-336. 【査読有】
8. 川島隆「マウトナーからカフカへ 多言語状況の痕跡」(日本独文学会研究叢書123巻、2017年、9-20頁)
9. 阿部賢一「カフカに見る「チェコ文学」との交点 ニェムツォヴァーとランゲルを介して」(日本独文学会研究叢書123巻、2017年、35-44頁)
10. 中村寿「世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア」(日本独文学会研究叢書123巻、2017年、21-34頁)
11. 中村寿「オーストリアの市民、ユダヤの国民 『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』」(『ドイツ文学』154号、2017年、176-194頁)【査読有】
12. 川島隆「幽霊たちの文通 カフカの手紙/カフカへの手紙」(『草獅子』1号、2016年、32-39頁)
13. 阿部賢一「プラハのシュルレアリスム 複数の「現実」、複数の「イズム」」(『ユリイカ』48巻10号、2016年、173-182頁)

〔学会発表〕(計39件)

1. Kenichi Abe: Svet zvirat v dile Bohumila Hrabala. Internationale Konferenz "Achtung, Ein grosser Autor! Milan Kundera und Bohumil Hrabal" 2019.
2. Takashi Kawashima: "So bereit ist man bei uns, die Gegenwart auszuloeschen." Spuren der Russischen Revolution in Franz Kafkas China-Erzaehlungen, 1917-1920. GDVT-Jahrestagung, 2018.
3. 阿部賢一「ボヘミアにおける文学史の系譜」(シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」, 2018年)

4. Kenichi Abe: "Exotiky se chran!" neboli mentalni mapa poetistu. "Slovníky modernistu a paradigmata moderny", 2018.
5. 熊谷哲哉「クリスティーネ・ヴニケにおける狂気とオカルティズム（ドイツ現代文学ゼミナール、2018年）」
6. 中村寿「第一次世界大戦期におけるユダヤ思想の展開：ビルンバウム・ブーバー・コーヘン」（北大思想史研究会、2018年）」
7. 吉川信「シンポジウム「101年目のExiles」導入」（日本ジェイムズ・ジョイス協会、2018年）」
8. 阿部賢一「チェコ語圏からの視点」（「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究に関する研究会、2018年）」
9. 中村寿「リヒャルト・ハルマツツにおけるユダヤ民族の位置づけ」（北海道ドイツ文学会、2017年）」
10. 吉川信「『エグザイルズ』の位置—もはや若くはない芸術家の実像」（二十世紀英文学研究会、2017年）」
11. 中村寿「世紀転換期ブラハにおける国民的ユダヤ運動の諸相：『自衛—独立ユダヤ週刊新聞』」（北海道ドイツ文学会、2016年）」
12. Kumiko Kiuchi: Age, Posture, Sexuality. Reading Happy Days in the Light of "Aristotle and Phyllis". "Beckett & Politics", 2016.
13. 吉川信「『フィネガンズ・ウェイク』"Museyroom Episode"について—ジョイスとナポレオン戦争（シンポジウム：Finnegans Wake Workshop—ジョイスとWaterlooとフランス革命）」（日本ジェイムズ・ジョイス協会第28回研究大会、2016年）」
14. Kenichi Abe: Inspirations of East in Central Europe. Karel Teige's Case. European Network for Avant-Garde and Modernism Studies, 2016.

〔図書〕(計10件)

1. 高田博行・山下仁(編)『断絶のコミュニケーション(ドイツ語が拓く地平)』(ひつじ書房、2019年、全272頁)[川島隆：第7章「ドイツの「フクシマ」報道と新聞読者の反応—または社会を分断する言葉の流通」(153-172頁)]
2. 高橋渡・河原真也・田多良俊樹(編)『ジョイスへの扉—『若き日の芸術家の肖像』を開く十二の鍵』(英宝社、2019年、全330頁)[吉川信：「スティーヴンと墮罪の甘美—もはや若くはない芸術家となるための」(85-109頁)]
3. Yoshihiko Hirano: Miszellen zu Celan. Entwuerfe zu Naturgeschichte und Anthropologie. Koenigshausen & Neumann, 2018. 396 S.
4. 小野尚子・本橋弥生・阿部賢一・鹿島茂『ミュシャ』(新潮社、2018年、全160頁)
5. 酒井志延・朝尾幸次郎・小林めぐみ(編)『社会人のための英語の世界ハンドブック』(大修館書店、2017年、全192頁)[桃尾美佳：第1章「英語圏の国々を知ろう アイルランド」(22-23頁)]
6. 阿部賢一『カレル・タイゲ ポエジーの探求者』(水声社、2017年、全340頁)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：吉川 信

ローマ字氏名：(KIKKAWA, shin)

所属研究機関名：大妻女子大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：70243615

研究分担者氏名：木内 久美子

ローマ字氏名：(KIUCHI, kumiko)

所属研究機関名：東京工業大学

部局名：リベラルアーツ研究教育院

職名：准教授

研究者番号(8桁)：90589657

研究分担者氏名：熊谷 哲哉
ローマ字氏名：(KUMAGAI, tetsuya)
所属研究機関名：近畿大学
部局名：経営学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：20567797

研究分担者氏名：中村 寿
ローマ字氏名：(NAKAMURA, hisashi)
所属研究機関名：北海道大学
部局名：文学研究院
職名：専門研究員
研究者番号(8桁)：40733308

研究分担者氏名：阿部 賢一
ローマ字氏名：(ABE, kenichi)
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院人文社会系研究科(文学部)
職名：准教授
研究者番号(8桁)：90376814

研究分担者氏名：桃尾 美佳
ローマ字氏名：(MOMOO, mika)
所属研究機関名：成蹊大学
部局名：法学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：80445163

(2)研究協力者

研究協力者氏名：城 眞一
ローマ字氏名：(JO, shinichi)

研究協力者氏名：平野 嘉彦
ローマ字氏名：(HIRANO, yoshihiko)

研究協力者氏名：鈴木 里香
ローマ字氏名：(SUZUKI, rika)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。